

教育実習を終えて

日本語日本文学科 4回生

森 文 恵

私は、母校である中学校で3週間の実習を行いました。実習が始まるまでは、3週間をとっても長いもののように感じており、高校の2週間の実習をとてもうらやましく思っていました。しかし、実際に実習を終えた今では、3週間はととても短い時間だったのだと考えを改めさせられました。

私の実習は水曜日から始まりました。最初の2日間は講話が中心で、大学の講義で学んだことをより深く、リアルに知ることができました。プリントや教科書に書かれている現場における課題にどのように学校が取り組んでいるのか等、生徒として学校に通っている時には気にもしていなかったことを教員として考えるきっかけになりました。

3日目から2週目の後半までは、授業観察が中心でした。個人的な反省としては、国語科ばかりではなく、他の教科の見学に積極的に行くべきだったと思っています。自分自身の行動を決めかねているうちに1日が終わってしまい、授業見学のアポイントが取れずに変な空き時間ができてしまったりしたのがもったいなかったです。

2週目の後半から実際に授業を行いました。実習で授業をして思ったことは、生徒の目線に立つことができているということでした。私は、1年生7クラスのうちの4クラスで授業を行いました。1単元を全5コマで行う予定だったのですが、うち2クラスは授業が計画通りに進まず単元終了に6コマかけてしまいました。「生徒の目線に立つ」言葉にしてみるととても簡単そうに感じますが、実際の授業で考えると、チョークの色・プリントの空白の大きさ・掲示物の大きさ・範読の速さ・課題の量と提出期限など必要事項を挙げるとキリがありません。これらを少しでも完璧に近づけるために欠かせないのが教材研究です。中学生にはとても豊かな発想力があります。「事前の準備がしっかりしていない授業は教壇に立つ自分本位の独りよがりになりがち。しっかり準備ができていれば生徒の突飛な発想も授業に生かすことができる。」この教科担当の先生からのお言葉がとても印象に残っています。

今回の実習では自分の未熟な部分がたくさん見えてきました。時には落ち込むこともありましたが、そんな時に支えてくれたのは同じ実習生の仲間たちや、在学時代にお世話になった先生方でした。私一人ではこの3週間を乗り越えることはできなかったと思います。また、どんなに疲れて家に帰っても、次の日に生徒の笑顔を見るだけで「よし、がんばろう」と思えた時に教員になりたいという思いが強くなりました。

幸いなことに私はこの春から教員として働かせていただけることになりました。この実習を通して見えた課題に再び直面することが必ずあると思います。その時に困らないようにするためにも日々の努力を積み重ねていきたいと思っています。

教育実習を終えて

英語英米文学科 4回生

佐藤 光 紗

私は10月に母校の高校で3週間の教育実習をさせていただきました。この3週間は長いようであつという間でしたが、振り返ってみると先生方や生徒の皆さんを始め多くの方々に支えられ、学びの多い教育実習でした。教育実習を通して感じた自身の課題について述べたいと思います。

私が難しいと感じたのは、相手(生徒)の視点に立って物事を考えたり話したりすることです。私は教育実習の初日の朝礼で生徒の皆さんの前であいさつをさせていただいた際に、「気軽に声を掛けてもらえたら嬉しいです。」といいましたが、それに対して指導教官の先生から「この学校は地域性的にもものおとなしい生徒が多いから、自分から話しかけていかないと生徒からは来てくれないよ。実習を‘する’ためにいかに生徒に近づき、関わるのができるのが大事だ。」というお話をしてくださいました。そこで私は教育実習では相手の立場に立って考えることで、少しでも生徒との距離を縮めることができるように、清掃の時間や放課後に生徒の皆さんと小まめにコミュニケーションを取り、声を掛ける際にはきちんと名前を呼ぶことやあいさつをすることを徹底するようにしました。しかしなかなかうまくいきませんでした。生徒の皆さんに嫌われることを恐れてうまく叱ることができず、無意識に常にニコニコしていたため、それが生徒の皆さんにも伝わってしまい生徒の皆さんとの距離も縮まりませんでした。指導教官の先生から「相手を主語に話し、考える」ということができているというお言葉をいただきました。毎日生徒の皆さんに朝・終礼でお話をする時間を作っていたのですが、その際、話をする相手の生徒ではなく「わたし」を主語に話していたのです。そこで授業を見学させていただくときや、先生方がお話をされる際に、生徒の立場で先生のお話を聞くようにしました。どのように話したら生徒を主語にして話せるのかという点に着目して聞いていると、小まめにきちんと理解できているのかを確認するために質問をして生徒自身を話に巻き込んだり、発問をする際はきちんとその意図を明確にしておられました。そうすることで生徒の興味を引くことができていると感じました。そこで自身の話をする際にも、自分の話は‘付録’としてそれを踏まえたうえで生徒の皆さんに伝えたいことを話すことができるようになり、最終日には少し生徒の皆さんとの距離を縮めることができましたと思います。

私はこの実習を通して、相手の立場に立って物事を考え話すということの難しさを改めて痛感しました。まず相手のことをよく知ろうとし、少しでも距離を縮めることがとても大切で、相手の話を傾聴し、一方的ではなくきちんと対話をしていく中でうまく自己開示をすることから信頼関係も築くことができるのではないかと感じました。教育実習を通して学ばせていただいたことをこれから活かして、教員になった際には生徒一人一人に寄り添った先生になれたらと思います。

教育実習を終えて

神戸国際教養学科 4回生
近藤 菜穂

5月12日から31日までの3週間、私は母校の中学校で教育実習をさせていただきました。教育実習を行った3週間は、「教育」についてより深く考え、自分自身が生徒という立場ではなく教師という立場で、学校のあり方や教師の仕事について学ぶことができた貴重な期間でした。

実習初日は学校行事があったため、1日の流れや動き方が特殊で戸惑う場面もありましたが、生徒と話をする機会を多く設けることができました。実習の流れとしては、1週目は指導教諭の先生や英語科の先生方の授業を見学させていただき、1週目の後半から少しずつ授業に参加させていただきました。授業の導入部分を1週目の後半から担当し、2週目からは本格的に授業をさせていただきました。導入・展開・終末部分と、少しずつ生徒の前に立って授業をする部分を増やしながら授業を実践させていただいたことで、全部分を授業することになった際にも、不安や緊張からくる抵抗感があまりない、良い状態で授業をすることができました。

授業形態は、担当学年が受験を念頭に置く3年生であったため、指導教諭の先生の授業をベースに考え、生徒たちのこれまでの学習方法に大きな変化を与えないことを意識して作りました。しかし、実際に授業をしてみると自分の未熟さを痛感しました。授業中に用いる教室英語の少なさにより、生徒たちに指示した際に生徒たちを困惑させてしまい、生徒にとっては1度しかなかったその授業を上手く行えなかったことに対して反省しました。その授業以降、教室英語を積極的に取り入れることを意識して授業を行うことで、生徒たちが指示に対して英語で返してくれることが多くなり、授業の雰囲気も良くなっていったと思います。

特別支援学級で英語の授業を見学した際には、少人数制ならではの生徒一人ひとりの実態に応じたきめ細やかな指導が行われている様子を見ることができました。また、生徒の成長を見ることに喜びを感じ、それと同時に50分という限られた授業時間の中で、生徒を理解させることの難しさを感じました。

英語の授業の他にも、道徳の授業を3年生の3クラスでさせていただきました。道徳の授業では、英語の授業とは異なる「間」の取り方に悩みました。道徳の授業をしていると、どうしても発問に対して生徒たちが静かに自分の考えを整理する「間」の時間が怖く、「間」を待たずに話してしまうことが多くありました。先生方から沢山アドバイスを頂き、生徒が考える時間を十分に取ることを意識的に行うことで、少しずつ改善することができました。

実習を通して、校長先生をはじめとする先生方から沢山お話を聞き、先生方の姿を間近で見ることで、教師の素晴らしさと大変さを知ることができました。また、授業実践では自分の得手不得手がわかり、今後の改善点を沢山見つけることができました。教師になった際には、生徒にとってはこの授業はこの1回きりであることを毎回自覚して授業を行うことが非常に重要だと感じました。学生でありながらも、生徒から「先生」と呼ばれるこの実習期間は、責任や緊張、不安を感じながらも、「教師になる」ことへの自覚を高める上で、私にとって非常に大切に貴重な時間だったと思います。教育実習でお世話になった先生方や生徒たちへの感謝を忘れず、これまでの学生生活や教育実習で出会った先生方のような愛情と情熱を持った教師を目指し、これからより一層自己研鑽に励んでいきます。

教育実習を終えて

史学科 4回生

高野華帆

私は6月3日から6月21日までの3週間、母校である洲本市立安乎中学校で教育実習をさせていただきました。安乎中学校は全校生徒数37名で、各学年1クラスずつと小規模な学校です。小規模だからこそ先生方や生徒と距離が近く、ほかの人がしていない経験も多くありました。多くを学び、自分自身の成長をととても感じる3週間を送ることができました。

1週目は講話拝聴と授業見学が主で、2日目に3年生で授業を行いました。私は実習前の打ち合わせで初回授業の範囲を聞いていた為、実習前に指導案とプリントを作成するなど準備はしていましたが、それでも授業が思うようにいかず、授業を行うことの大変さを改めて体感しました。また、板書がとにかく下手で、プリントのカッコ内の重要語句だけを書くものとなってしまいました。指導教員の先生からも、「板書を見ただけで生徒が授業内容を理解できる必要がある」とご指摘を受け、次回授業からは板書計画に力を入れようと目標を立てました。

2週目は授業見学と授業の繰り返しでした。授業は毎日行い、週の前半は1年生で後半は2年生を担当しました。2週目は指導案の作成はせず、その代わりに板書計画を何度も繰り返し作成しました。授業内容を黒板1枚にまとめることが難しく、また、どの部分の色を変えるか、どこを口頭のみでの説明にするか、など様々なことを考え、工夫することにととても苦労しました。はじめは何度も書き直してはいましたが、授業の回数を重ねるにつれ、最終的には指導教員の先生にも褒めていただくようになり、嬉しかったです。板書計画以外には、教材研究に多く時間を割きました。しかし、時間が圧倒的に足りず、なかなか思うようにいきませんでした。その結果、授業の中で生徒からの質問に答えられなかったり、間違った説明をしてしまったりした場面がありました。教材研究の重要さと難しさ、そして1日の短さを実感し、「学び続けること」が大切だと再認識しました。

また、2週目には道徳の授業も行いました。道徳の授業は、生徒として受けたことも少なく、どのような授業をすればいいのかが全く分からない状態でした。1週目に見学をさせていただきましたが、1度見ただけで授業を行うのはとても難しかったです。特に生徒の解答に対し、その解答をどのような質問をして深めていけばいいのか戸惑うことが多かったと感じます。

3週目は2週目と同様、授業見学と授業を行いました。最終週は研究授業が木曜日にあつたので、学校の空き時間や帰宅後の使える時間を最大限に使い、準備をとにかく徹底しました。研究授業当日にはほとんどの先生が来てくださり、様々な意見やお褒めの言葉をいただきました。自分自身が成長していると最も感じた瞬間でした。しかし、反省点も多くできたのが事実です。その中でも「主体的、対話的、深い学び」をどのように授業に組み込んでいくかが最大の課題となりました。

はじめは3週間がとても長く、嫌になることも多かった実習ですが、最終的には「楽しかった」「3週間が早かった」と心から思えるものになりました。先生方は温かく受け入れてくださり、様々な面で気に掛けていただきました。生徒とも3週間の中でコミュニケーションを多くとり、実習中支え、助けてもらいました。最終日に貰った全校生徒からのメッセージカードのプレゼントは、私の1番の宝物です。

最後まで実習を楽しみながら乗り越えることができたのは、恵まれた環境で実習をさせていただいたからです。感謝の気持ちを忘れず、これからも教員になるべく努力していきます。ありがとうございました。

教育実習を終えて

教育学科 3回生
古川 未来

私は、4週間の教育実習で数えきれないほど多くの大切なことを得ることができました。教育実習が始まる前は、自分が児童の前に立って45分間の授業をしたり、連絡事項を伝えたりしている姿が想像できずにいました。お世話になったクラスの児童はとても明るく元気いっぱい、すぐに私が抱えていた不安は消えてしまいました。このようなクラスの中でとても充実したかけがえのない4週間を過ごすことができ、実習校の先生方、児童の皆には感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、授業についてと児童とのかかわりについての2つの面から目標を立てて実習に臨みました。授業については、「他の先生方の良さを学び、自分の授業に取り入れる」「見つけた課題はなるべく実習中に改善する」という目標です。児童との関わりについては、「先生と児童との距離感を知る」「さまざまな場面での指導の仕方を知る」という目標です。この目標を達成しようとする中で学んだことが2つあります。

まず1つ目は、経験を次に活かそうと努力することの大切さです。私は、算数の面積単元11回と社会の工業製品についての導入1回、計12回の授業をさせていただきました。ほとんど毎日授業をさせていただき、準備、実践、反省、準備を繰り返す日々でした。特に私は、発問の精選が上手くできず時間配分に狂いが生じて焦ってしまうことが多くありました。授業展開を考える際には、45分の中で何をどのように児童に伝えるべきかを常に意識していました。毎日の反省の中で、担当の先生から、「昨日の反省が今日はとても良くなっていたよ。前回よりスムーズにできていたね。」と言われたときは努力が少しずつ自分の力になっていく喜びを感じました。また、研究授業後の学年部の先生方との反省会では、「以前注意したことがとてもよくなっていたし、アドバイスも取り入れようとする姿勢がみえた。」と言ってくれました。先生方の良さやアドバイス、見つけた自分の課題はすぐに取り入れたり直したりすること、できなくても努力し続けることが大切であると学ぶことができました。

2つ目は、責任感についてです。45分の授業は児童にとっては1度きりの大切な時間です。その時間を教師がどのように使うかがとても重要であり、その決断に責任を持たなければいけないと実習を通して強く感じました。授業計画を一生懸命考え、教材準備をし、授業中も細心の注意を払っても失敗することがあり、それは実習生だけではなくと教えていただきました。私が初めて授業をしたとき、大失敗をし、担当の先生に「現役の教師でも満足する授業は数えるほどしかない。満足せずに振り返って次に活かそうとする向上心を持ち続けてね。」と言われました。分かりやすく楽しい授業をすることも教師としての責任ですが、失敗したときに児童のことを考え、次にどうすべきかを考え続けることも大切な教師としての責任だと感じました。

教育実習を終えた今、次に待っているのは教員採用試験です。実習生としてではなく、本当の教師になって子どもと全力で向き合える日が1日でも早く来るよう、勉学に励みます。そして、教育現場に出た時には、今回の教育実習で得たことややりきれなかったことを活かせるよう、さらに成長したいです。

教育実習を終えて

教育学科 3回生
的 場 みゆき

私は、母校である広島県の小学校で教育実習を4週間させていただきました。実習に行くまでは、「子どもの成長と一緒に感じられる」、「1カ月大好きな子どもと関われる」という楽しさと、「授業うまくできるかな」、「子どもと仲良くできるかな」などの不安がありました。しかし実習が始まると、子どもの頑張っている姿・笑顔は、私の力となり、不安に思っていたことは考える暇もなく充実した楽しい時間を送ることができました。その中で学んだ印象深い出来事が2つあります。

1つ目は、授業の大切さです。私は、1年生の担当でしたが、1～6年生の授業時間は同じ45分間で、内容の難易度は全く異なります。そのため、言葉遣いや分かりやすい説明・授業展開の仕方も1年生と6年生では違うと改めて実感し、教材研究がとても重要になってくることを学びました。しかし、異なる点ばかりでなく、共通点もあります。例えば、45分間という慎重な時間をどのように使い、どこまで理解させるか、毎回の授業で目標を決めておくことや導入で児童を引き付ける発問を行うなどたくさんあります。児童の大切な授業時間で教える責任があり、これは教師が1番に考えることだと思いました。

2つ目は、自分から積極的に行動することです。これは、教育実習だけに関わらず、社会に出ても必要なことです。私は、実習を通してより大切さを実感しました。初日に教頭先生から「積極的に行動してください。」と言われました。私は、“当たり前だ”と思っていました。しかし、話を聞いて実習していくうちに分かったことがあります。まず、自分で考えて行動することがとても大事ですが、その判断が本当に正しいのかを考えることです。子どもを叱るタイミング、先生と児童という接し方、思い返せばたくさんあります。でも、1番に考えることは“子ども”でした。子どものためになるのか、授業と指導どちらを優先するのかと言う基準となるものを大切にして学校生活を快適に過ごせるように教員が協力していることを学びました。また、経験の少ない私が長時間悩んでもでない答えがたくさんあります。困った時は、自分よりも経験している先生に話し、アドバイスをもらって即解決することが必要だと思いました。少しでも子どものためになることを考えて時間を有効に使っていることを知りました。

上記の2つ以外にも教育実習ではたくさんのことを学ばせていただきました。教育実習を終えて意識も変わりました。「子どもが好きだから」や「教えることが好きだから」と言う教師になりたい夢から「子どもに教えた時の“分かった!”という顔が見たい」や“先生楽しかった”と授業でも休憩時間の遊びでも言ってもらえるようになりたい」と具体的な教師像と絶対に叶えたいという願望が湧いてきました。さらに、実習最終日、最後の挨拶の後、校長先生を始めたくさんの先生方から「教員採用試験受かって、うちの学校に来てね」や「一緒に働けることを楽しみにしてるよ」、「先生みたいな教師がうちの学校にほしい」など嬉しい言葉をいただきました。そのため、教員採用試験に向けて勉強しなきゃという焦りと闘いながら「絶対に合格してやる!」と言う強い気持ちが芽生えました。大学でも授業1回1回を大切にして仲間と夢や目標に向かって頑張ります。教育実習で学んだことと関わってくださった先生・児童との思い出を励みに努力し続けていきたいです。

教育実習を終えて

教育学科 3回生
塩 沢 茜

教育実習が始まるという実感がわからず、不安のままスタートした実習でした。振り返ってみると現場の先生の仕事を経験させていただいて、小学校教諭としてのやりがいや楽しさ、人に教える難しさを感じた4週間であったと思います。その中で、学んだ事が2つあります。

1つめは、児童と信頼関係を築くことの大切さです。実習先の児童は「新しい先生が来た。」と喜んでくれて私に積極的に話しかけてきてくれた児童もいた半面、私から声をかけないと話してくれない児童もいました。そこで、少しでも早く児童と信頼関係を築くために毎日1人1回以上のコミュニケーションをとることを目標に頑張りました。また、休み時間は鬼ごっこなどの遊びを通して積極的に児童と話しかけ、給食の時間は一人一人を詳しく知ろうと様々な話題をもちかけ楽しく食事をしました。すると、最初は話してくれなかった児童も、私が教室に行くと真っ先に私のもとに駆け寄ってきて、話しかけてくるようになりました。授業においても、最初は一部の児童しか発表してくれませんでした。しかし、「先生の授業だから発表頑張るね。」と言ってくれて、日が経つにつれてたくさんの児童が発言や発表をするようになりました。このように、児童と信頼関係を築くにはコミュニケーションをとる事が大切であり、一人一人と信頼関係を築くことは授業にも影響してくることを学びました。

2つめは、児童の実態にあった関係性のある授業を構成し実践することです。初めての授業では、予定していた活動をすべてやりきることができずに45分が終了してしまいました。この経験から、指導案作成の際、教材研究を通して自分自身が授業内容をしっかり理解しておくことが大前提で、授業で身につけさせたい力は何かを明確にすること、そのためにどんな指導をするかという様々な面で考えることを学びました。さらに、教科や児童の実態に応じた教材の良さに気づき、比較や関連付けを行うことで他教科等との結び付きも重視していく必要があり、改めて教材研究の重要性を学ぶ事ができました。また、今まで机間指導は勉強が苦手な児童を指導する時間だと思っていましたが、それだけではなく、観察や助言を通して授業が理解できているか、指示が通っているかを確認する時間でもあるということに気づきました。教育実習で人に教えるという難しさを改めて痛感し、「私は、教師にむいているのかな。」と悩んだ事が多々ありました。でも、そんな時に児童から「先生の授業、面白かったよ。」「次はいつ授業してくれるの。」と声かけがあり、その言葉に何度も救われました。「この子供のためならどんなことでもやり遂げよう。」と思い4週間で全力で頑張ることができました。

教育実習を通して、改めて小学校教諭になりたいと強く思うことができました。現在の教師の仕事はとても大変です。しかし、児童は授業で学んだ知識や技能を生かし新たな課題を解決していくというように、教師は一人一人の学びや育ちに影響を与えることができ、児童の日々の成長を身近に感じることでできる大変やりがいのある仕事だと思います。

この4週間、目標をもち一所懸命に頑張ったという自信と、実習校の先生方や子ども達への感謝を忘れずに、多くの方から学ばせていただいたことを再確認し、次の関門である教員採用試験に向けて勉強に励み、再び教壇に立ちたいと願っています。

教育実習を終えて

教育学科 3回生

林 佑 香

教育実習を一言で表すとしたら、「宝物」です。私の担当は5年生でした。思い返せば、初めて教師になりたいと思ったのも5年生でした。当時の私は、まさか10年後に教育実習生として母校に戻って来ることを想像すらしていなかったと思います。今回の実習を通して、2つのことを得ることができました。

1つ目は、「自信」です。実習前は、45分間の授業を最後までできるのか、児童と信頼関係を築くことができるのか、不安と緊張を抱えていました、しかし、全校児童へ向けた挨拶を終えるとすぐに緊張が解け、いつも通りの私で児童と接することができました。すると、初回の授業を終えた後、指導教諭の先生に「ここ数日間だけ一緒に過ごしたとは思えない、児童と自然なやりとりができていた」と褒めていただきました。また、最終日にもらった児童からの手紙には、「迷わず笑顔で進む力をもらいました」「先生の笑顔を見ると嬉しくて、私も笑顔になりました」「林先生との出会いに感謝します」「林先生みたいな優しい大人になりたいと思いました」と書いてありました。他にも、児童が私にくれた言葉の一つひとつが私の自信に繋がり、毎日楽しく、前向きに過ごせました。子どもは、偽りのない眼差しで大人を見ていると感じる場面が多く、「ありのままの私」で向き合うことの大切さを実感しました。悩むこともありましたが、「児童の笑顔を見るために頑張りたい」という一心で、最後までやり遂げることができました。児童が私の良さを教えてくれたことに感謝しています。

2つ目は、「やりがい」です。母校とはいえ、当時とは違う雰囲気やルール、先生、児童の姿を目の当たりにし、教育現場の大変さ、現実を知りました。特に授業では、児童の実態や興味・関心に配慮しなければなりません。それでも、諦めずに取り組むことで、授業をすることが楽しみになっていきました。何よりも嬉しかったのは、児童が準備物に興味をもってくれたり、「先生の授業、楽しかった」と言ってくれたりしたことです。現場の先生方も授業づくりに日々悩まれていると知り、学び続けることこそ、教師のやりがいであると考えました。また、苦手なことにも粘り強く取り組み、一步ずつ成長していく児童の姿をそばで見守り、寄り添うことができました。ここにも、教師と児童が共に成長していけるという教師の魅力があり、今まで以上に教師になりたいという思いが強くなりました。30人いれば、30通りの接し方があり、30もの児童が輝く場面、場所がある。そこへ立ち会える。何人かの児童が、将来の夢や目標を話してくれました。私が「応援してるからね」と伝えると、嬉しそうに目をキラキラと輝かせていた児童の表情を今でも鮮明に覚えています。

この4週間、特別支援学級を含めた全学年の授業を観察させていただいたり、沢山の先生方のお話を聞くことができたり、子どもと関わる機会がたくさんもてたりと、貴重な経験ができ

ました。人生の中で感動と充実で溢れた4週間は、宝物のように輝いていました。「林先生のチャレンジ力と明るさは、教員には大切な素質です。またご一緒できることを楽しみにしています」「子どもたちは林先生のこと大好きです。私も数年後に、一緒の職場で共に働くことができる日を楽しみにしています」とおっしゃってくださった先生方の言葉を胸に、誰に対しても何に対しても誠実な人で在り続けたいです。

私は、「児童にとって学校、学級を安心できる居場所にする」ことが夢です。これからも失敗を恐れず、常に前を向いて、仲間と共に小学校教師になる夢を追い続けます。そして、必ず本物の先生になって、恩を返したいです。

幼稚園教育実習を終えて

教育学科 4回生

黒田結友

私は母園である幼稚園で、4歳児のクラスで4週間の教育実習をさせていただきました。4回生にして初めての实習ということもあり、実習が始まる前は不安で行くのが嫌で、先生になりたくないというのが正直な気持ちでした。しかし、この4週間で幼稚園教諭になろうと心変わりをしました。

子どもたちに出会うと、もっと関わりたい、喜んでいて姿が見たいという気持ちがどんどん大きくなりました。初日に、「先生ー！」とみんなに呼ばれ、分からないことだらけの私でも、子どもたちにとって私は1人の先生であるのだと実感したことを今でもよく覚えています。私は実習を通し、子どもの数だけ関わり方があり、教師の数だけ保育の仕方があり、正解は1つではないのだと感じました。現場では、知識や技術だけではなく、個性豊かな子どもたち一人一人に合わせた柔軟な対応が求められました。初日から私に駆け寄り甘えてくれる子どももたくさんいましたが、自ら関わってはくれない子や、話しかけても答えてくれない子もいました。目の前のことに手がいっぱいになってしまい、積極的に関わってくれる子や、援助が必要である子には自然と関わりが増えていきました。数日経ち、全体を見ることができるようになると、全然話せていない子どもがいることに気づき、様々な声掛けや関わりを積極的に行うよう心掛けました。最終日に近づくにつれ、自ら手を繋いでくれたり話をたくさんしてくれるようになったことが、1番嬉しかったことです。また、音楽会の練習をしている時期だったのですが、自信が無さそうにしていた子が、担任の先生が掛けた言葉により、とても笑顔に変わりやる気に繋がっている姿が印象的でした。対応の仕方が難しい子がいる時には、担任の先生にその都度相談させていただきました。その際には「〇〇ちゃんは〇〇な所もあるけど〇〇な所もあってね。」と教えてくださり、ひとりひとりの力や性格を把握、理解しその子どもにあった指導や声掛けが必要なのだと感じました。私は、子どもの本当の気持ちや力を見抜き、それを引き出すことができる先生になりたいと思いました。そして、先生は分かってくれるという安心感をたくさんあげることができたらなと思います。

喧嘩をしたり優しさが芽生えたり、できることが増えたり、日々成長を繰り返している子どもたちと過ごし、本当に充実した4週間でした。子どもにしかない感性に触れ、子どもの見る世界は私とは全然違うことに気づかされることもたくさんありました。大変なことやしんどいことも多くあるのも現実ですが、その何倍もの価値を子どもたちはくれると感じました。先生にはならないという固い私の意志を、覆してしまうほどの素晴らしい体験をさせていただきました。卒業後は、幼稚園教諭として日々成長していけるよう努力と経験を重ねていきたいと思っています。そして、子どもたちが幼稚園生活だけでなく、その後の人生も楽しく生きていけることに繋がる援助をしたいと思っています。

幼稚園教育実習を終えて

教育学科 4回生

松本 奈々

神戸女子大学附属高倉台幼稚園で一年を通して実習を行なわせていただきました。一年を通じた実習であったため、年間行事に参加することができたり、4月からの子どもの姿との変化をより身近に感じることができました。

高倉台幼稚園の子どもたちと幼稚園で過ごす中でさまざまな思い出ができました。運動会の竹馬練習の時に、初めはやる気にならず練習を嫌がる子がいました。その子がやる気になるよう「〇〇くんが竹馬に乗って頑張っているところをお父さん、お母さんに見せよう！」と声をかけてみました。運動会にお父さん、お母さんが来ることをふと思い出したのかやる気がなかった〇〇くんが竹馬を持ってきて「お姉さん先生、持って」と竹馬に乗る練習を始めることができました。本番前には〇〇くんが竹馬に笑顔を見せながら練習する姿が見られました。「〇〇くん！ここまで乗れるようによく練習したんやね」と声をかけると誇らしげな顔で練習を続けていました。はじめはやる気になれないような子に対して、どのような関わりをすればやる気になるのだろうか日々考えていました。

子どもとの関わりでうまく行く日もあれば全くこちらの言葉かけに反応を示さないこともたくさんありました。子どもとの関わり方に悩んだ時には、実習担当の先生にたくさん助けていただきました。先生の関わり方から子どもと「約束をする」という方法を学び、実践しました。はじめはなかなかうまくいきませんでしたでしたが関係が築かれてきたころには私の話に耳を傾けてくれることが多くなりました。

部分実習や研究保育などで悩むことがたくさんありました。そんな時に、実習担当の先生がさまざまな案を提案、アドバイスしてくださったことで子どもたちがより楽しめるような活動、個々に合わせた援助を考えることができました。活動を終えた後、子どもたちが「りす（制作活動のこと）楽しかった！〇〇の作ったやつ見て〜！」と話しかけてくれた時はとても嬉しかったです。部分実習や研究保育からはクラス全体だけでなく、子ども一人一人にあった保育を考える必要性を再確認しました。指導案通りにはなかなか行かないことは多々ありました。今後の課題として、一人一人の子どもの姿を捉える力を身につけ、子どもの姿にあった展開や言葉かけをしていくことを発見できました。

たくさんの失敗をし、悩みが尽きなかった高倉台幼稚園での実習ですが、毎日子どもたちが「奈々先生、奈々先生！」と笑顔で駆け寄って挨拶をしに来てくれたこと、発見したことや出来るようになったことを一緒に喜びあえたことでとても楽しく充実した実習でした。実習担当の先生の子どもたちへの関わり方、子ども一人一人を尊重し愛情いっぱいに関わっていく姿勢を大切にしていきたいです。

一年間という長い期間、実習をさせていただいた高倉台幼稚園の先生方みなさんに感謝しています。本当にありがとうございました。

教育実習を終えて

家政学科 4回生
東 佑 香

3週間の教育実習を経験し、教員のやりがいや大変さ、生徒たちと関わることのできる喜びを知り、改めて教師になりたいという気持ちが強くなる貴重な毎日を過ごすことができました。振り返ってみるとこんなに早く過ぎ去った充実した3週間は人生で初めてで何物にも代えがたい素晴らしい日々でした。

最初は慣れないことの連続で生徒たちもなかなか心を開いてくれなかったり、生徒との距離感がつかめず、自分の思い描いていた方法で関わることができずに悩むこともありましたが、「失敗してもいいから自分のやってみたい、やってみようと思うかかわり方をしてみてください」と指導教諭の先生からアドバイスをいただき、自分らしい関わり方を意識することで少しずつ生徒との距離を縮めることができました。自分から生徒のことを知ろうと関わる姿勢は生徒たちにも届くことを実感しました。日々生徒たちと関わっていく中で、生徒の行動の背景にあるものに気付くことができ、声かけの仕方や接し方が少しずつわかっていくのが嬉しかったです。

実習中には普段見ることのできない先生方の動きを見せていただきました。生徒の成長段階に応じて先生方が生徒とのかかわり方を変えていたり、授業の中での発問の一つひとつから、生徒が一步前に成長できるような言葉かけをしていたのが印象的でした。普段から生徒をよく見て一人一人をわかっていないと作ることのできない授業であったり、作ることのできない空間をたくさん見ることができました。毎日自分の担当教科以外にも様々な教科の先生方の授業を参観させていただく中で、新しい発見がいくつも見付き、自分の財産になる学びがたくさんありました。

また、授業では家庭科の授業と道徳の授業をさせていただきました。全体で授業を行う中で、全員が興味を持てる授業を作ることがどれだけ難しいことなのかよくわかりました。自分が思っている以上に生徒にとってわかることやわからないことが多いこと、生徒一人ひとりに理解の差が大きいことにも気づくことができました。視野を広げて生徒の目線になって授業づくりをしなければいけないと感じました。プリントに入れる写真、文字の種類やプリントの大きさ等もこだわることによって生徒みんながわかる授業につながることを、日々指導教員の先生からアドバイスを頂き改善する中で実感しました。授業は思うように進まなかったり、理想とする授業の遠さに悩むこともありましたが、生徒に家庭科に授業ができることの嬉しさが大きく、たくさんの生徒に「楽しかった」「またやってほしい」という言葉をもらい、改めて家庭科が好きだ、家庭科の知識を身につけさせられる教員になりたいと強く思いました。日々努力し、たくさんの引き出しを持って教壇に立てることのできる教師になりたいと思います。

最後に、教育実習生としてできることややりたいことが経験でき、生涯忘れることのできない喜びや充実した毎日を味わうことができました。実習で感じた多くの経験はこれから生きていく上での糧になりました。これからも多くのことを経験し、生徒たちの実態に合わせて柔軟に対応していくことのできる教員を目指して、勉強を重ねていきます。そして、人生の中でたった3年間しかないかけがえのない高校生活にかかわることのできる教員という仕事のやりがいを忘れることなく、教師という仕事を楽しめる素敵な教師になりたいと思います。

栄養教育実習を終えて

管理栄養士養成課程 4回生

下川 はるか

私は5月に母校の小学校で1週間実習をさせていただきました。実習期間はあっという間で毎日児童たちとの関わりを模索しながら過ごしていました。その中で、感じた事や印象に残っていることを述べていきたいと思います。

まず、児童たちと関わる上では、やはり私の方からたくさんコミュニケーションをとっていかねければ、仲は深まらず、待ってはいけない、自分からどんどん関わっていかねければいけないと感じました。初日が社会見学で、子供たちと関わる時間はあったにも関わらず、あまり自分から積極的に近付いていかなかったことが反省する点だと感じました。また、子供たちは私が思っている以上に忠実に大人の真似をし、言うことを聞いている、覚えているということが分かりました。そのため、行動や言動には非常に気を遣う必要があると感じました。子供たちは、先生の言う事は正しいと思っているので、注意しなければいけないと思いました。また、休み時間など、「遊ぼう」と何人もの子供たちから声をかけられても限界があるので、子供たちを傷付けるとして曖昧な返事をしてしまうと、余計に傷付けてしまうので無理なことは無理とはっきり言わなければいけないなと思いました。

私は最終日に3時間分の授業をさせていただく機会がありました。そこでは、先生方が実習中の1週間ずっと授業の準備を手伝ってくださったり、指導してくださったので、本当に感謝しかありません。学習指導案の書き方では、細かいところまで丁寧に教えてくださり、最後まで作り上げることができたと思います。私自身が小学生という対象を想像し、授業をイメージしていたのと、普段現場にいて常に子供たちを見ている先生方は、やはり授業を行う上での視点が違うということを感じました。実際に授業を行い、子供たちの反応や他の先生方のアドバイスなどから、まず、チョークの色は気を付けるべき点であると感じました。色覚について特性がある子などがいるかもしれないということまで頭が回らなかったのが、反省するべきところだと思います。子供たちに分かりやすく、と思っても全員に分かりやすく捉えてもらうことは難しいかもしれません。しかし、できる限り全員に理解してもらえよう工夫し、改善等しなければならぬと思いました。また、授業内では、指示をするタイミングを少しでもずらしてしまうと、指示が通りにくくなったりしてしまうので、1つ1つの指示や指導側からの発言もタイミングというものが非常に大切になってくると感じました。そして、授業は日々改善することが重要で、言い直しなど毎日毎日子供たちを見ながら、その時その時で変えていくことも大切であると思いました。

栄養教育実習ということで、調理室でも実習をさせていただきました。近年、アレルギーを持った児童が増えていることもありアレルギー対応には非常に気を遣われていました。調理室で最も感じたことは、給食を作る過程ももちろん重要ですが、後片付けの業務も非常に重要だということです。給食を作るという点ばかりが注目されがちですが、子供たちには食べ終わった後の洗浄業務も大変であることを伝える必要があると感じました。

この1週間で経験したことを忘れず、立派な教員になれるよう日々勉強し、努力していきたいと思います。

栄養教育実習を終えて

健康スポーツ栄養学科 4回生
濱 本 理佳子

5日間という短い期間でしたが、母校での教育実習はとても刺激的で栄養教諭の置かれている立場、求められている能力を改めて実感しました。さらに10年前に卒業してから母校のルールも変わり「児童主体の学び」というのを授業のテーマに置き、児童自ら考え、相手に伝える流れを先生方は確立されていました。5日間での学んだことは、2つあります。

児童と先生の距離の近さです。5日間、2年生の担当になり、授業中も休み時間も一緒に過ごし担任の先生と児童たちの信頼が生み出されている瞬間を覗くことができたように感じました。実習に参加するまでは、先生はとても児童のことを見ていてそこに児童はついていく、反応する、という風に考えていましたが、実際には、児童も先生方をよく見ている、見られているということを実感しました。教育実習2日目か3日目には、児童から「先生はいつも〇〇するね」と癖を指摘されました。一緒に過ごしより良い授業を作っていく中で栄養教諭の難しさを痛感しました。クラスを持たない栄養教諭にとってTTで行う食育指導というのは、事前の打ち合わせがとても大切であることを知りました。クラスの雰囲気や題材設定等の打ち合わせは、複数校を任される栄養教諭にとってこれらの事前打ち合わせをしっかりとやるかやらないかで授業がうまくいくかも決まってくるとおっしゃっていました。研究授業を終え、「子供主体の学び」を重要視している母校に沿えるような授業展開を構成するのもとても難しいものでした。授業回数の少ない食育の授業では、児童らに様々な知識を知ってもらいたいという思いが強かった部分がありましたが、授業のメインとする部分はどこなのか、一番児童らに学んでほしいところはどこなのかを明確にするほうが、児童たちの理解につながっていくというのを感じました。どの知識を養ってほしいのかを明確にし、さらに普段の授業の科目とどのように結び付けて展開を行っていくのか計画を立てていきたいと思います。

2つ目は、栄養教諭の仕事の役割です。食育授業を始め、給食室との連携、食物アレルギーをもっている児童への対応などがありますが、それに付随する児童らを守る多量なマニュアル・知識や経験が求められていました。母校の地区では、給食の献立は共通メニューがベースであり、月に一回オリジナルメニューを考える役割が地区内で順番が回ってきます。給食室の調理員の方々と一緒に考えている姿や、毎日給食室へ向かい、味を確認する姿を拝見しました。さらに、食物アレルギーの児童とその保護者の方々との細かなやり取りや先生方との確認、給食室内での徹底した調理導線を間近で拝見し、ミスの許されない仕事であり、命を預かる責任というのをもとても感じました。

真剣な目でこちらを見て授業を受ける姿はとても感動し、授業終わりのチャイムが鳴ると「もう授業終わりなの？」という声が聞こえてきてこれ以上のない嬉しい気持ちになりました。児童らが学ぶだけではなく、教師も一緒に成長を重ねていくのだと強く感じました。改めて教師という仕事の良さ、やりがいを感じる教育実習となりました。リアルタイムで動く学校生活の中で、栄養教諭として働く責任感やたくさんの課題も見つけることができ、5日間の経験を活かしてさらに努力していきたいです。

養護実習を終えて

看護学科 4 回生

増 中 美依奈

教育実習を終えて、最も感じていることは、養護教諭の魅力です。

私は、学校に1人という配置の養護教諭にどこまで役割を果たせるのか疑問を抱いていました。いざ小学校に行くと、約800人の児童がおり、先生は教室に行ったり保健室で対応していたり、休まる時間がありませんでした。保健室に来る子の中には、怪我や体調不良を訴える子だけでなく、心の調子が悪い子や、友達といざこざがあり泣いている子、休み時間に頻回に来室する子など様々でした。個性も多様である児童に、限られた時間の中で、その児童の訴えに耳を傾けて訴えの本質に気づく先生のコミュニケーション力と対応力を観察すると、ただ寄り添うだけでなく、愛情を持ち、時には背中を押し、学校で健康に過ごせるように関わることが大切だと学ぶことができました。

また、そのような対応が出来るのは普段から児童一人ひとりと向き合い、集団の中での個を理解しているからだと感じました。担任の先生と積極的にコミュニケーションを取ることによって、保健室での姿だけでなく、教室で過ごす元気な姿も知ることができ、少しの異変にも気づくことができるのだと思いました。

友達といざこざがあり泣いていた子が、保健室に来た時に、担任の先生に言えなかったことをゆっくりと話し始め、養護教諭もそれに応じゆっくりとその子のペースで聞いていたり、「今話したことを担任の先生、お友達とお話して嫌な気持ちを解決してみない？」と問いかけたりすることで、児童も安心した様子になり、担任と児童たちで話し合うことができていました。このように、養護教諭は心の面での支えとなることもあり、養護教諭という存在や、保健室という居場所が、児童にとって安心感を与えるものであり、それが本音を打ち明けられることに繋がると感じました。

私が最も心に残っていることは、保健室以外の場所でも「怪我してしまった」「頭が痛い」などと訴えてくる児童が徐々に増えてきたことです。最初は「先生いつもどこでおるん？」と言われることもありましたが、給食、掃除、昼休みの時間で、児童と積極的に関わり、給食後の歯磨きの際、児童の歯ブラシの毛先が広がっていることに気づき、校内放送を行い、掃除や昼休みの時間には、正しい用具や遊具の使い方を日常的に指導しました。また、校内巡視を行う際には、児童に挨拶をしたり、何気ない会話をしたりするなど、児童に関心を持つことを意識し、ひとりひとりどのように学校生活を送っているのだろう、今日は元気だろうか等、思っていることを伝えるようにしました。そうすると、児童から声をかけてくれることも増え、信頼関係を構築したことで、保健室対応の時に症状を聞きやすく、より正しく詳しく状況を把握できるようになりました。また、発達段階に合わせて問いかけ、怪我の対応をしながら、どうし

て怪我をしたのか、怪我をしないように次はどうすればいいのかを一緒に考えることができ、自分でできる手当てや防ぐことができる病気、怪我について関心を持ってもらえる機会を作ることができました。さらに、いつも「いってらっしゃい」と送り出す養護の先生のように、私もこれらの学びや児童との関わりの中で得た信頼関係から、自信を持って保健室から「いってらっしゃい」と声をかけることができるようになりました。

以上のことから、養護教諭の役割は多岐にわたり、1人職で大変な部分もありますが、教室では出せない児童の表情や言葉を受け止めることができ、心身のことや、それ以外でも何かの時に頼れるになる、安心できる存在になることが魅力だと思います。また、養護教諭の関わりによって、児童が元気で学校で過ごせたり、笑顔になったりすることがやりがいとなり、児童へ指導や愛情を与えるだけでなく、児童から与えられるパワーもあることを改めて感じる事ができました。

私は将来、看護師として子どもと関わることが多いと思いますが、子どもの関わり方や学校との連携、学校の実態について学ぶことができ、教諭としての視点も活かしていきたいと思えます。あまり意識できていなかった養護教諭としての道が大きく開き、いつか学校で子どもたちの健康と安全を守り、のびのびと学習できる場を作りたいと強く思うようになりました。「いってらっしゃい」と子どもの背中をそっと押し、寄り添うことのできる養護教諭になりたいと思えます。

観察実習レポート

教育学科 3回生

橋本 奈々

1. スクールサポーターとしての活動から得たものについて記述してください。

①児童との関わりから学んだこと

今年度のスクールサポーターでは主に1年生を担当させていただきました。その中でなかなか授業に集中することのできない児童のサポートをしていたのですが、その児童の近くにいると、他の児童が「僕の近くにも来て欲しい」と拗ねてしまうことがありました。周りの児童からすると、特別扱いしているように見えてしまっていたのかなと今振り返ると思います。サポートの仕方はその対象の児童だけでなく、クラスの様子や周りの児童によっても変えていかななくてはならないのだと学びました。

②教師との関わりから学んだこと

1年間をトータルして、子供を褒めることが多いA先生と叱ることが多いB先生という、タイプの違う先生のもつ2つのクラスを行き来し、観察をすることができました。1学期は児童の様子にそれほど差はありませんでしたが、教育実習を終えて、2学期になり教室に行くとどちらのクラスも雰囲気は全く違うものになっていました。A先生のクラスは児童が歩き回ったり、話をしていたりして授業中にもかかわらず休み時間の延長のような感じがしました。B先生のクラスは児童が委縮してしまい、1年生らしさがあまりないクラスになっていました。褒めるだけ、叱るだけではなく、どちらもバランスの取れた教員が指導力のある教員なのではないかと考えさせられました。

2. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

1の②で述べたように、学級経営における教師の指導力というものを考えさせられた1年でした。私は褒めて伸ばしていくことが大切であり、それができる先生が指導力のある教員だと思っていました。しかし、それだけでは必ずしも指導力のある教員だとは言えないと思いました。時にはしっかり叱ることも必要で、叱らなければならないときにしっかりと叱ることができる。そしてそのあと、褒めて次につながる指導ができる教師が指導力のある教師なのではないかと感じました。学級経営においては様々な方法があると感じました。いろんな先生の学級経営のやり方を学び、吸収し、生かしていけたらと思います。

3. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

スクールサポーターとして小学校にいる間、一番多く子どもたちと関わることができるのは休み時間です。その時間を使って、できるだけたくさん子どもたちとコミュニケーションをとるように心がけていました。また、授業中になかなか見てあげられない子どもたちと関わることもできます。私は、休み時間も子どもたちと過ごせる教師になりたいと思います。授業中では見られない子どもの姿を見ることもあり、こんな一面もあるのだと驚かされることもあります。スクールサポーターを通して学んだ、子どもたちとの関わり方やコミュニケーションのとり方は教師になって生かしたいと思います。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

特に課題はありません。

5. 2・3回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？しませんか？またその理由を記述してください。4回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？勧めませんか？またその理由を記述してください。

来年も続けたいと考えています。教育実習に行き、スクールサポーターとして活動していたことにより、クラスに入って何をしたらいいのかわからない、学校やクラスに入るのに緊張してしまう、子どもたちの前で何を話したらよいかかわからないというようなことはありませんでした。今までスクールサポーターとして活動してきたからこそ、その自信をもって教育実習に挑むことができました。他の教育大学に比べて実習の回数が少ない中で、スクールサポーターとしての活動は私たちにとって貴重な時間だと思います。この活動を生かし、教壇に立つまでに実践の場を設けることは、学校になれること、またさらなる自信にもつながっていくと思います。2年間活動を続けてきて、学びがなかった日はありません。私自身、昨年度のスクールサポーターよりも、今年度のほうができることが増えたように思います。来年度もスクールサポーターを通して成長できるように頑張りたいです。

6. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

なかなか授業に集中できないA児が授業を受けようとしなないのは、授業が嫌だからではなく、分からないからだということが分かった瞬間のことが一番印象に残っています。その日もA児に付いてサポートをしていた。なかなか机に向かうことができず、算数の時間だったのでA児に何となく「算数好きじゃないの？」と聞いてみた。すると、少し考えてからA児は「違うねん、わからへんねん」と言った。今までは「先生がお話しているよ」というような声掛けをしていましたが、今までの支援の仕方や言葉かけは間違っていたのだと思いました。勉強が嫌いなわけではないのであれば一緒にならのできるのではないかと思い、次に、「じゃあ、先生と一緒に問題やっぺいこうか！」と声をかけると、A児は素直に「うん！」と机

に向かい一緒に考えながらゆっくりですが問題を解くことができました。また、国語でも書きたくないのではなく、ひらがながまだ覚えられていなかったから書くことができなかったのだと分かりました。その後からは、50音の書かれた下敷きをおいて文字を書くように支援していきました。児童が集中できないのには理由があるのだということに気づかされました。児童が何となく発した言葉でも、支援のヒントが隠されていることがあるのだと改めて思いました。

7. その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

特になし。

観察実習レポート

教育学科 4回生

朝 倉 梨香子

1. スクールサポーターとしての活動から得たものについて記述してください。

①児童との関わりから学んだこと

児童と同じ目線で関わるのが大切だということ学びました。様々な学年の児童と関わる機会があり、最初はどのように接したらよいのか悩むこともありましたが、子どもたちと一緒に休み時間たくさん遊んだり、積極的に声をかけたりしていくことなどにより、児童の気持ちに共感しながら同じ目線で話すことが児童と関わっていくうえで大切なのではないかとということに気付きました。

②教師との関わりから学んだこと

私はスクールサポーターとして、サポートをする立場なので、困っている様子の子を見つけたら、すぐに手助けしてしまうことがありました。その時担任の先生が、「自分でやらせてください」という風におっしゃられていました。そのあと様子を見てみると、少し時間がかかっても自分自身の力で成し遂げることができていたし、周りの児童が声をかけて、助け合っている姿も見られました。そのことから、子どもと関わる時に、手助けをしすぎてしまうと子どもの成長する機会を奪ってしまうことになるので、見守ってあげることも大切だということ学びました。

③学校という組織との関わりから学んだこと

毎週学校に行かせていただく中で、情報共有することの大切さを感じました。朝、保護者の方からの電話を受けた先生は、その内容を担任の先生または教頭先生に伝え、共有している様子が見られました。また放課後には、その日あったことを学年団の先生と話していたり、場合によっては保護者の方に連絡したりされていました。自分が得た情報を自分の中にとどめておくのではなく、日ごろから周りの人たちと共有していることで、子どもたちに何かあったときにチームとして対応できるということ学びました。

2. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

私は4月から教師になるので、学級経営の様子を重点的に見るようにしていました。教室の使い方にしても、クラスによって全く違い、きっとそれぞれに先生の思いが込められているのだろうと考えながら、見させていただきました。私は、子どもたちの頑張りを認めてあげ、それが子どもたちの自信につながり、何事にも意欲的に取り組めるような人になってほしいと考えています。そのために、小学校でもされていたように、日ごろから子どもたちの

様子をよく見て、変化に気付き褒めてあげるのはもちろん、学級通信や教室の掲示物にも、頑張る子供たちの様子を写真に収め、子どもたちの自信につながるような発信の方法を私もやってみたいと思います。また、子どもたち同士も認めあえるクラスにしたいので、温かい言葉がけをしている児童がいれば、褒めて、周りの児童もそこから良い影響を受けて、クラス全体が温かいクラスになればいいなと考えています。

3. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

スクールサポーターでは、ほかの先生方よりも子どもたちとの年齢が近いことから、子どもたちも親しみを持って私と接してくれていたように感じます。教師になったら忙しくなり、何かあったときに冷静になって子どもたちの目線で考えるということをおぼえてしまいそうな気がします。初心（スクールサポーターでの経験）を思い出して、子どもたちに寄り添える教員になっていきたいと考えています。また、困ったことなどがあれば、視野を広く持ち、周りの頼れる先輩方にアドバイスなどもいただきながら、成長していける教員でありたいです。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。

私は、学校の用事などでスクールサポーターに行くことが難しいときは、曜日を変更させていただいたり、4時間だけの活動にさせていただいたり、教頭先生と相談して決めさせていただいていました。また、教員採用試験の時期は、学校の先生方も理解してくださり、しばらく活動を休ませていただいていた。

何かあれば小学校の先生と相談することで、学業との両立はできるということが、私の経験から分かりました。このシステムについての改善点・アドバイス等はとくにありません。

5. 2・3回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？しませんか？またその理由を記述してください。4回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？勧めませんか？またその理由を記述してください。

スクールサポーターを勧めます。

私は2回生の頃から同じ小学校での活動を継続しています。その中で、子どもたちの成長、学年によってのクラスの雰囲気の違い、行事などの向けての学校の動きなどを長期的に見て感じることができました。また、教員採用試験の際にもスクールサポーターでの経験をたくさん話すことができました。このようなことは、スクールサポーターでしかできない貴重な経験だと思うので、これら教師を目指す下級生には勧めたいと思います。また、私の経験から、できれば同じ小学校で3年間継続することを勧めたいと思います。

6. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

音楽会です。音楽会は、練習から本番まで関わらせていただきました。今年は、音楽会の練習をしていく中で、児童とコミュニケーションをとることを意識していました。

練習しているとき、少し音楽が苦手そうな子に寄り添って補助をすることがありました。その時に、「どこが分からない?」「できるようになったところ聞かせて!」などと声をかけるようにしていました。そうすることで子どもたちからも、「できないからやりたくない」「できるようになってきたから楽しい!」というような本音を聞き出すことができました。また、練習が終わってからも、自分から「僕、歌を歌うことが大好きだから、音楽の時間が幸せ」というように、話しかけてくる児童もあり、ほっこりするようなこともありました。

また、今年は音楽会に向けての会場設営にも携わりました。5年生と6年生が学校を代表して、準備をしてくれていました。その際に、下級生の児童のために協力し、声を掛け合っただけでなく、重たい楽器を運んだり、会場の隅々まできれいにしたりする児童の姿が見られました。音楽会は、音楽の技能だけでなく、心の成長にもつながる素敵な行事であるということを実感しました。

本番では、日ごろの頑張り、練習の成果が発揮されており、とても感動しました。

7. その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

私は、2年生のころからずっと、毎週毎時間、様々なクラスの様々な授業のサポートをさせていただきました。そのことにより、この3年間で多くの児童、先生方と関わることができ、より多くのことを学ばせていただくことができました。とてもいい経験になりました。この経験を4月からの教員生活に生かしていきます。

観察実習レポート

教育学科 4回生

温井詩織

1. スクールサポーターとしての活動から得たものについて記述してください。

①児童との関わりから学んだこと

この3年間、スクールサポーターとして週に1回小学校へ通い子どもたちと向き合ってきました。スクールサポーターを始めた頃は子どもとの関わり方が分からず、戸惑うことが多かったです。今の自分と比べると消極的だったと思います。毎週先生方はどのように話しかけているのか、どういった声をかけているのかを意識して学ぶようにしていました。だんだんと子どもと関わることに慣れてきて授業を集中して受けられない子や自ら話しかけてくれない子などにも積極的に声をかけられるようになりました。積極的に行動してたくさん声をかけ、一人一人と向き合うことで子どもたちは心を開いてくれることを実感しました。

②教師との関わりから学んだこと

クラスにはいつも叱られる子がいるけど、叱られてばかりだと自己肯定感が低くなってしまいます。しかし悪いことを正してあげないのは指導者としては間違いです。ダメなことはしっかり指摘するけど、その分他の子よりもっと気を配って、良いところを褒めてあげることが必要なのだということを学びました。

③学校という組織との関わりから学んだこと

子どもにけじめをつけさせることが大切だということをこの1年を通して改めて実感することが多かったです。授業が始まる前の礼を全員がきちんとできるまでする先生のクラスはまとまっていると感じました。時間を守る、仲間と協力しあうなど当たり前のことをしっかり、根気強く指導されていました。学校という集団での生活の場を通してルールを守ったり、相手の気持ちを考えて行動したりする力を養っていかなければならないと学びました。

2. 特別支援教育、学級経営、教材研究のいずれかに的を絞って貴女が小学校で学んだことを記述してください。

「教材研究」

授業はその単元の内容ができるようになればいいだけでなく次の学年で勉強する内容につながっていくことが学力を伸ばすことにつながるということを学びました。一つの問題をするうえで子どもたちはどんなことにつまずき間違えるのかをできる限り考え把握しておくということ、自分の1つ1つの発問にどういう意図があるのかということ、45分の授業で何を一番教えたいのかということ、など教材研究は本当に奥が深く大切なことだと学びました。

3. 将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かしますか？

現場の様々な先生方の授業の工夫や叱り方、褒め方などを見てきて私だったらどのようにするか考えることが多く、どのような先生でありたいかという基礎が築けたと思います。スクールサポーターでは特にすぐに子どもたちと仲良くなる力を身につけました。子どもと積極的に話し、休み時間は全力で遊び、基準を作って叱り、いいところをたくさん見つけて褒めることはこれからも続けていきたいです。子どもの気持ちを理解して向き合うことは、先生が伝えたいこと（例えば思いやり）も気づかせられると思います。私は前向きに生きる子どもを育てるためこれからも子どもたちと全力で向き合っていきたいです。

4. スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題について記述してください。改善点・アドバイスがあれば記述してください。特にありません。

5. 2・3回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？しませんか？またその理由を記述してください。4回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？勧めませんか？またその理由を記述してください。

下級生にも勧めたいです。実際の小学校の現場でしか学べないことがたくさんあるからです。大学の講義で学んだことを実践することでさらなる学びにつながります。3年続けてきて思うのは経験することが大切だということです。現場の先生方の指導の仕方や視野の広さ、言葉の使い方、授業のテンポ、子どものひきつけ方などを見て本当に私はまだまだ課題がたくさんあることを実感します。そんな先生方もたくさん経験を積んでこられたのだと思います。尊敬できる先生がいて、学べる環境は本当にありがたいことだと思います。いろんな先生方の授業が見られるのも学生だからできることだと思います。3年経った今でも新しい発見があるし、少しずつ成長していると感じます。これからももっと成長していけるように子どもと向き合おうとする気持ちをもって積極的に行動していきたいです。

6. サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

2回生の9月、夏休みだったので空いている時間は小学校に行っていました。運動会のダンスの練習中に体育館の隅に座り込んで練習に参加しない4年生の男の子がいるという話をききました。教頭先生からぜひその子についてあげてほしいと頼まれました。しかし今まで4年生と関わったことがなかったので不安でした。練習を見に行ってみるとその子は話の通りみんなが踊っている中、座り込んでいました。「一緒に踊ろうや。」と声をかけてみましたが「俺なんかに教えてる時間無駄やで。他の子のとこ行って。」とネガティブな発言をかえされました。なんとか心を開いてもらいたくてたくさん話かけました。話をしているとダンス

が嫌いというよりは踊れなくて踊る気をなくしてしまっているように感じました。だから私はその子の手をつかんで必死に一緒に踊りました。そして褒める言葉をたくさん言うようにしました。何日かそれを繰り返していると一人でも踊れるようになってきて踊ろうとするようになりました。最終的には最初の時とはまるで別人のように楽しそうにして踊っていました。こんな姿はじめは全く想像してなかったのでびっくりしました。少しでもその子の力になれたと思うと本当に嬉しくて、涙が出そうになりました。

7. その他、特別支援、学級経営、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

3年間同じ学校でスクールサポーターをしてきて、子どもたちの成長をたくさん見ることができました。3年前、私がスクールサポーターを始めた頃にどう向き合うか悩まされていた小学1年だった男の子は3年生になり頑張っている姿を何回も見かけました。子どもたちの成長は本当にすごいなと何度も感動し、子どもたちからパワーをたくさんもらいました。もう教壇に立つ日がすぐそこだと思うと、どんな子どもたちと出会えるのかワクワクしてきます。この3年間スクールサポーターで私に関わってくださった先生方、子どもたちには感謝でいっぱいです。この恩を返せるようこれからも日々努力していきます。本当にありがとうございました。